

## 教育研究グループ「教育結果」報告書

報告日 令和 3年 4月25日

グループ名	障害児・者の 美術活動の在り方研究会	フリガナ 代表者氏名	フシミ アキラ 伏見 明
学校名 (代表者)	東京都立永福学園 (伏見 明)	電話番号	03-3323-1380
研究テーマ	特別支援学校の生徒や卒業生の優れた美術的才能の さらなる伸長に要する教育的支援の実践的研究		
研究期間	令和 2 年 4 月 1 日 開始から 令和 3 年 3 月 31日まで		
研究結果 の概要  ※詳細は別 紙により 報告	<p>障害児・者の美術活動の在り方研究会は、優れた美術的才能のある、または美術活動に強い興味・関心のある都立特別支援学校等の生徒及び卒業生を募集し、美術活動に没頭できるワークショップ「自由な美術活動空間」を提供している。</p> <p>令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を考慮し、都立永福学園の体育館という広い会場を使用し、1回当たりの参加者を15人程度に限定して募集し、実施した。さらに、短時間に参加者が集中しないよう、5時間（午前11時から午後4時まで）という長時間会場を開放し、参加者は、都合の良い時刻に来校し、帰宅できるようにした。このような取組を、令和2年10月31日（土）と11月14日（土）に行った。参加申込者は、1回目13人、2回目18人であった。</p> <p>本研究会は、障害のある生徒等に対し、可能な限り自由に美術活動に没頭できるよう空間を作り、参加者の美術的才能を制限なく発揮できるようにすることを趣旨としている。このため、入手できる限りの画材を準備し、それを全て見える形で並べ、参加者が自由に手に取り、ふんだんに使えるようにしている。画材の種類や量について、昨年度よりも拡大を図っている。しかも、今年度、密を避けるという意味もあったが、参加者が満足できるまで、美術活動に専念できるよう、昨年度3時間であった時間設定を5時間にまで拡大した。</p> <p>このように条件設定の自由度を増し、そのことを参加者募集の案内に示したことにより、令和2年度は、昨年度に比べて参加者の居住地が広域になった。可能な限り、制約されず美術活動に没頭したい生徒等や没頭させたい保護者が多数いることを実感した。</p> <p>令和元年度からの参加者は、参加を重ねることで作品が変化しており、「表現」という行為自体に、「表現」そのものを変化させる力があることを目の当たりにした。このことから本事業は、平素、障害のある生徒等が、「表現」できずに内在化させてしまっているものを表出する機会となっていると言える。</p> <p>また、これらの活動を基に、令和3年2月20日（土）に学識経験者等を招いたシンポジウムをオンラインで開催した。シンポジストからは、このような活動の意義や、このような活動が、美術教育の在り方を変化させる可能性があるなど、示唆に富んだ発言が多く聞くことができた。</p>		
その他 特記事項	本研究会の研究は、都教育委員会の「文化プログラム・学校連携事業」指定を受けている。令和3年度においても指定を受けたことから、継続して実施する。		

# 障害児・者の美術活動の在り方研究会 教育結果報告

障害児・者の美術活動の在り方研究会は、優れた美術的才能のある、または美術活動に強い興味・関心のある都立特別支援学校等の生徒及び卒業生を募集し、美術活動に没頭できるワークショップ「自由な美術活動空間」を提供している。

令和2年度は、感染拡大防止の観点からワークショップ開催は2回のみとしたが、いずれの回も参加者にとって貴重で有意義な時間になったと感じている。また、ワークショップの成果を踏まえ、示唆あるシンポジウムが開催できたので報告する。

## ワークショップ

### 自由な美術活動空間 ～ 思いっきりアートする、 全身でアートする ～

- ・ 第1回：10月31日（土） 11：00～16：00  
（受付は10：40～15：00）
- ・ 第2回：11月14日（土） 11：00～16：00  
（受付は10：40～15：00）

（各回の募集参加者：15人）

講師：中津川 浩章 氏（アーティスト・アートディレクター）

於：東京都立永福学園(杉並区永福1丁目7-28) 体育館

## シンポジウム

### ～ 「表現」って何だ!? ～

- ・ 実施日時：2月20日（土） 13：30～15：30

※ オンライン配信にて実施。後日アーカイブ配信実施

（募集参加者：60人）

シンポジスト：本郷 寛 氏（東京藝術大学参与・名誉教授）

中津川 浩章 氏（アーティスト・アートディレクター）

於：東京都立永福学園(杉並区永福1丁目7-28) 会議室

# 自由な美術活動空間（第1回）

10月31日（土） 11:00～16:00

## 【参加申込者数】

永福学園生徒	他校生徒	永福学園卒業生	他校卒業生	合計
2人	6人	4人	1人	13人

## 【活動の様子】



## 【実施上の工夫】

- ・ 体育館の半面を覆うように、ビニール養生を施した。
- ・ 新型コロナウイルス感染拡大防止策として、1テーブルに1組の参加者のみ利用するという形を基本とした。

## 【成果と課題】

- ・ 体育館という開放感のある空間で実施したことにより、参加者も開放的になり、自身の活動に没頭できた。
- ・ 参加者同士の距離が大きくなったため、良い影響を与え合うという効果が、十分には得られなかった。

# 自由な美術活動空間（第2回）

11月14日（土） 11:00～16:00

## 【参加申込者数】

永福学園生徒	他校生徒	永福学園卒業生	他校卒業生	合計
4人	6人	6人	2人	18人

## 【活動の様子】



## 【実施上の工夫】

- ・参加者同士が影響し合えるように、机のレイアウトを「口の字型」から「三角形」にし、距離は保ちながら互いの活動が感じられやすくした。
- ・画材の配置も、自由に手に取りやすく工夫を凝らした。

## 【成果と課題】

- ・継続して参加者の作風が変わったり、大きな作品を作り出したりといった変化が見られた。
- ・作品を床に並べるのではなく、そのまま展示できるようにできれば、創作意欲につながる。作り、鑑賞し、触発されるというサイクルが重要である。



# シンポジウム ～「表現」って何だ!?!～

2月20日(土) 13:30～15:30

## 【参加申込者数】

オンライン参加	会場参加	関係者	アーカイブ視聴	合計
8人	2人	7人	54人	71人

## 【シンポジスト】



本郷 寛 氏 (東京藝術大学名誉教授)



中津川 浩章 氏 (アーティスト)

## 【シンポジウムの内容】

- ① 自由な美術活動空間の報告 (記録映像の視聴)
- ② 自由な美術活動空間の感想 (記録映像を基に)
- ③ 学校における美術教育について
- ④ アート活動を続けていくためには



## 【シンポジストの主な発言】

### 〈普段できないことができる空間〉

- ・いろいろな画材があり、大きな画面があり、4～5時間書き続けられる。参加者の気持ちの盛り上がりに応じていける。
- ・美術や芸術は、遊びの要素から変化していくもの。遊びと積極性、主体性を分断しないようにする。一つを否定することが、発展していく可能性の否定につながる。

### 〈新しい発見の機会・場〉

- ・美術活動を通じて、子供が自分自身の新しい発見をする。新しいものに出会うという繰り返しが大事になる。
- ・描いて終わりではなく、展示することで自分を客観的に見ることになり、自分の存在を肯定したり、発見したりする。他の子供の良さも発見していく。学校に美術の展示スペースを作っていけるといい。自由に展示でき、描ける場が地域にあるといい。

### 〈画材とは〉

・画材というのは奥が深い。自然物との出会いが作品になることもある。教育では絵の具とかを扱うことで、画材に表現が引っ張られてしまうことがある。



- ・子供たちの興味をひくものを用意しないと新しい表現とか創造性とかは生まれてこない。ワークショップの材料を決めたとき、視覚・触覚・臭覚など、子供たちの興味を引く物を、子供の気持ちになって、同じ目線で集めた。
- ・会場に来て何もしようとしなない参加者が、粘土を触っているうちに、こねだし、最終的に絵を描いていったこともあった。

### 〈自分の価値を押し付けない〉

・運営側の価値基準ではなく、参加者の感受性の幅に基準を置くことが大事で、積極性・創造性をいかに引き出すかが重要となる。



・美術は描き方を教えるだけでなく、表現するきっかけを整えていくもの。「表現できる」、「表現できることの喜びを知る」ということのきっかけを作っていくことが大切。自分が感じたことを外へ出すことを経験の中で築いていく。

- ・子供たちの内面の価値が共有されないと、子供たちに孤独感や分断が残ったり、言葉での表現が難しい子供たちは自分を表現しなくなったりする。表現は、成長する上で大きな要素である。

### 〈美術の強み〉

- ・美術は、作品があるということが魅力で、作品が独り歩きしていつてくれる。障害のあるなしは関係がない。作品がよければよい。
- ・美術をとおして触れあることができる。この人すごいという思いが大人になって、差別でなく凸凹を自分の中に取り込み、文化や生活が豊かになる。
- ・人間教育として表現はとても大切。特別支援教育の美術こそが、美術教育の根本的なものを変革できるのかもしれない。

### 【令和2年度を振り返って】

表現とは、内面にあるものを表出するだけでなく、表現により内面にあるものを育ていけるということを実感した。継続してこのような空間を作っていくことの意義を強く感じる事ができた

